

目次

|  |     |         |
|--|-----|---------|
| □ 第一回文科學術談話會總會席上に於て                              |     | 中川會長    |
| □ 美と善  |     | 深作安文    |
| □ 青島陥落後に於ける對支關係                                  | 二、三 | 山田千代    |
| □ 過去に於ける日本の女子                                    | 二   | 島山とし    |
| □ 英國の女子體操專門學校に就いて                                |     | 二階堂さくよ  |
| □ 唱和存稿並序   |     | 細田劍堂    |
| □ 伊東にて   |     | 尾上柴舟    |
| □ 町の子  |     | 千葉安良    |
| □ 雜詠「ゆすらの實」「逝ける友」「若葉」「朝の光」                       |     |         |
| □ 不惜身命   |     | L. M. 仰 |
| □ 斷片   |     | F. L. 妙 |
| □ 關西旅行の後に  |     |         |
| ■ 雜報 □ 第廿二回學術談話會記事 □ 會計報告 □ 會員動靜 □ John Burroghs |     |         |
| □ 小女劇 □ 婦人ミ平和 □ 篤學家ミ日本文學                         |     |         |
| ■ 研究 □ 賀茂祭に就きて                                   |     |         |

第一回學術談話會總會席上に於て

中川會長

毎年一回總會を開く事は、學術談話會の規定の中に明記せらるゝ所であるが、今迄は開かるべくして開かれなかつた。今日部長委員其他諸君の斡旋で總會が開かれたのは甚だ喜ばしいことである。講演題目も各科の最近一年間の進歩といふ事に取られたのは、實に適當な思ひ付きであると思ふ。自分の希望としては各科の専門とする所のみ偏せず廣く共通學科の研究報告をも加へられたならば一層よい事であらうと思ふのである。

何れの國に於ても教育に關する事といへば、昔は殆ど文科的のものに限られた様に思はれて居た。後に理科的のものを加へ最後に技能的教育を加へたのである。文科的の科目は一般教育上基本的基礎的學科と云はれ、文科を離れての基礎は他にないかの如く思はれて居た。尙理科も全部が文科同様に基本的のものとは言へぬかも知れぬが段々基礎學科の位置を占む様になつた。數學の如きは文科に劣らず寧ろそれ以上の基本となつて居る。技能科目は餘程後れて居たが、今日では基本科目に加はり、益勢力を逞しくせむとして居る。手工の如き—専門的ならざる普通一般の—今日では何れの國にても教育の基礎と看做されて居る。又種々の

文科研究にも理學的—科學的と同意義にて—研究法が行はれて居る。即科學的方法是技能及文科的のものにも行はれて、昔は性質上外形上研究せられた事が今日では分量的に研究せられて居る。現今世界教育上最も新面目と見るべきものは作業教育、活動教育、進んで精力發揮教育等である。從來の教育は教師より教へられ只之を受取るばかりであつたが眞の教育は生徒が自發的に作業によつて事物を眞に了解しなければならぬといふのである。之が我國ではどの位の程度まで行はれて居るかは知らないが、雜誌に新聞に日毎に多くの新意見が發表せられて居る。以て教育が技能化せられた様に思はれるのである。坐つて考へたゞけでは教育は出來ない。つまり教育は實社會に早く接觸させなければならぬ、準備だけでは不十分である、教育は徹底せしむべく上滑りして濟ますべきものではない、といふ事を今日では實際に行ふ様になつたこと、思ふ。思ふに我國一般教育が、かゝる方向に進むがよきか否かはわからないが、此潮流に我國だけが、抵抗する必要もないから多分之に従つてゆく事となるであらう。

さて文科理科技能科について我國の教育に關し一二のことを述べて見やうと思ふ。文科に關しては國語教育を益有効にする爲に力を盡すべきである。從來多くの力が注がれて居たに係らず割合に其効果が擧つて居ない様に見える。國語基本科であるから特に根本的に假名遣、言語、文字、文章等諸方面から研究すべく其結果を一朝に收むることは困難であらうが今の儘に過ごしては教育者としてすまない譯である。

理科については餘り考へもないが、眞に事實を理解せしむるに多少不十分な事があるであらう。實物觀察を十分に行はせ、眞に了解して我物にさせなければならぬ。此點について餘程力を要するのである。要目や細目は今日全くかへてはならないといふものでもなく、手續さへ盡せば之に教育上の考案を加へ得るのであ

るから之を最有効になすべきである。

技能科は職業専門教育と普通教育とを區別する事が必要である。今日は之を混用して居る事が多い様である。之を明にする事が根本で之に本づき普通教育的要目及細目を作るべきである。今日の要目を動かすべからざるものと見ないで効力を大ならしむる様に切望してやまない。技能科の中に我國では手藝が幼稚である手藝に教育法なしといふのではないが、之に教育上如何なる法があるかは從來わかつて居ない様である。種々改良すべき事が多いであらう。將來に於て自ら之を擔當する者は宜しく之を研究すべきである。一般技能科に教授要具を用ゐる事の多くなつたのは其進歩であるが之を更に掛圖なり何なり用ゐて益用具を多くする手と器械と並び用ゐる事の出來るものは之を並用する様にありたい。

普通教育上手藝に器械を用ゐる事には異論があつて、ミシン使用の主張に反對し手でする所に價值があるといふ人が多い。しかし教授上には要具を工夫し、早くそして間違ひのない様にすべきである。刺繡なども器械を用ふれば趣味は淺いが早く出來る、手でしたものは巧であるが出來は遅い。故に兩方並用し對照して見る必要がある。組糸の器械についても自分は常にさう考へて居るのであつて、とにかく教育上手藝科を進める事には大に注意を要すること、思ふ。